

二〇二一年度 国語 中期 解答・解説

【五〇分／一〇〇点 ※配点詳細非公表】

【一】評論（説明的文章）

〈出典〉「デイベートが苦手、だから日本

人はすごい」（朝日新書）

日本のコミュニケーションが、グローバル時代にこそ価値を増すことを述べた作品。「自己主張」が欧米と異なる理由や、対決しない心を作る日本語の構造など、心理学博士の観点から様々な事例を挙げて日本人の美質を説明する。

〈著者〉榎本博明

東京都出身の心理学者。東京大学教育学部教育心理学科卒業。東芝市場調査課勤務の後、川村短期大学講師、大阪大学人間科学部助教授、名城大学人間学部教授後退職し、人間科学研究所代表となる。

問一 漢字の書き

- a 当然
- b 緊張
- c 違和感
- d 慎（み）
- e 協調

漢字力は、正確な読解に欠かせない重要な力である。小学校で一〇二六字、中学校で一〇一〇字、つまり中学校までに計二一三六字を学習する。そのため、国語学習の際には意識して学習してほしい。語彙の学習は、学校の授業や自学自習を

はじめ、日常生活あらゆる場面で気にかけることから始まる。①読み、②書き、③意味理解、④語彙の用例、⑤構成や故事まで気につけ、音読や書く練習をする、辞書を引く、語彙を利用して短文をつくってみるなど、工夫して学習することが大切だ。

問二 文法…接続語の知識

接続詞の理解は、文と文、段落と段落のつながりや文章の構成を確認しながら読解する「構造的読み」を確立する上で重要である。このような問題を解くことで、論理的文章を書く力も養われる。接続詞を何となくあてはめてみるといった感覚的な解き方でなく前と後のつながりをしっかりと見極めたうえで接続詞を選択するように心がけよう。

空欄 A は、英語の「I」と日本語の「私」の使われ方と、欧米人と日本人の姿の描写の間に位置している。また、空欄 A を含む文が「くようだ。」と結ばれていることから、下に比況表現を伴い、何かが他の別のものとよく似ていることを表す語である「まるで」を選択しよう。

空欄 B は、「お互いを『お父さん』『お母さん』と呼び合う夫婦、『じっちゃん』『ばっちゃん』と呼び合う老夫婦」という日本での日常風景を受け、「欧米流の感覚からすれば、非常におかしなことに

違いない。」という筆者の考えの間に位置している。そのため、先の内容と後に続く内容が反対の意味を持つことを示す接続詞「だが」を選択しよう。

空欄 C は、相手との関係性によって自然に自称詞を変える日本人の姿から「自己主張を慎み、相手に対する思いやりを中心に動く日本人の心の特徴」への展開を受け、目下の者にとつての立場を優先し自称詞を用いるという説明の間に位置している。そのため、前に述べた事柄に対して後で述べる事柄で説明や言い換えを示す接続詞「すなわち」を選択しよう。

### 問三 対比的読解と要約

この設問に取り組むためには、自称詞の「I」と「私」の違いについて本文でどのように述べられているのか、対比関係にある二つの項目の特徴を整理する力が求められる。

傍線部①の直後の段落では「I」について、その後の段落では「私」について明されている。本文によると、「I」はどのような文脈でも変わらないが、「私」は文脈によって姿形を変えするという特徴がある。これを踏まえ、「I」の使われ方であるエを選択しよう。

アは「私」の使われ方の説明のため不適当。イは後半部分が不適当。相手の出

方に関わらず「だれが何と言おうと『I』は『I』なのだ」というのが筆者の意見である。ウは全体的に不適当。「I」はどのような状況でも「I」という形は変わらない。また、本文で「自己の確立」については述べられていない。

### 問四 対比と因果関係

この設問に取り組むためには、自称詞「I」と「私」の違いと、欧米人と日本人との対人場面における心のあり方の違いが関わっていることを読み解く必要がある。

傍線部②の前の段落では相手がだれであるかによって姿形を変えていく『私』という自称詞の「揺らぎやすさ」について述べられ、傍線部②の直前では「絶えず相手の出方をうかがいつつ相手に合わせて自分の出方を決めようとする」という日本人の姿について述べられている。これらの内容を踏まえているイを選択しよう。

アは後半部分「自分の要求を伝えない日本人の姿勢」が不適当。本文で「相手に合わせて自分の出方を決めようとする」とあるように、日本人は自己主張をしないのではなく、その方法を他者によって変えるのだ。ウは全体的に不適当。エは後半部分「自分を低く評価したがる日本人の性質」が不適当。自己評価について

は述べられていない。また、前半部分の「最年少者のために自称詞を決定する日本語」は、本文の〈中略〉以降の内容である。

めは冒頭の「I」と「私」について言及しながらまとめを導く部分。これらの内容を踏まえると、ウだけが本文の趣旨とは異なる。

#### 問五 具体と一般（同義関係）

この設問に取り組むためには、傍線部の後で挙げられている複数の具体例から、共通する要素を抜き出す必要がある。

本文では、子どもや孫の立場を踏まえて自身と配偶者の呼称を自然に工夫している夫婦が例として示されている。つまりこれらの具体例から、日本人はその場における最年少者に自身や近親者の呼称を合わせることが分かる。

以上のことから、自身や近親者ではなく最年少者である相手の呼称を変えている選択肢ウ「幼い男の子に対して、『きみ』ではなく『ぼく』と呼び掛ける大人。」を不適当な例として選択しよう。

#### 問七 全体の内容理解と言語活動

ここでは、生徒四人の意見から、本文の内容を理解しているかを問われている。つまり、この設問に取り組むためには、本文全体の内容を理解する必要がある。

本文では、状況や相手との関係性によって自称詞を変える日本語の特徴を踏まえ、日本人の「他者に開かれた自己のあり方」が「グローバル化の時代に異文化同士が対立せず、理解し合う」ために必要だと述べられている。そのため、本文の内容と合致しない「他者に合わせる日本式のコミュニケーションだと、グローバル化の時代には対応できないと危機感を覚えた。」と述べているDを選択しよう。

#### 問六 本文の要旨

本文の要旨に関わる「開かれた自己」について理解する問題。〈中略〉以降、具体例をはさみながら複数の記述が見える。

一つめは **B** の直後、呼称の使い分けが日本人の心の特徴によるものと言及する箇所。二つめは具体例を含み、自分より他者を軸にして動くありかた。三つ

#### 【二】 文学的文章（エッセイ）

〈出典〉JAF Mate（ジャフメイト）より「幸せって何だろう」（エッセイ）の連載 企画 2019 7/2020 8.9より

〈著者〉  
西加奈子はイランのテヘラン生まれ、エジプトのカイロ、大阪で育つ。『あおい』

でデビュー。他の著書に『ふくわらい』や『サラバ!』などがある。

ブレイデイみかこは福岡県生まれ、英国ブライトン在住のエッセイスト。著書に『労働者階級の反乱——地べたから見た英国』『離脱』（光文社新書）などがある。

#### 問一 エッセイ中の語彙

a 「もじる」はねじる、ひねる、よじるといった原義から派生して、言葉を使い換える等の意味がある。本文脈に則した意味を選びたい。

b の「担保」は保証すること。「ほしう」には同音異義語が複数あるため、そういういったものと混同しないように丁寧に学び、解答してほしい。

#### 問二 「」の修辭的用法

「」は当該部分を強調したい時、通常と異なる意味で用いたい場合など、修辭的に用いられることがある。1はその反対、「祈り」をいわゆる通常の祈りとし、本文の趣旨である、ブータンの人々にとって祈りが日常であることを示す表現の工夫である。

2では直接会うことをつながったとし、オンラインでつながったと錯覚している状態を「つながった」と表現している。

#### 問三 因果関係の読解

ブータンの人の不思議そうな顔に対し、筆者は「質問の意味が分からない」のだろうと推測している。取材を通じて分かったことなのだろうが、筆者はその理由を質問の内容である「幸せ」について考えたこともないほど、祈りのように日常の中に幸せがあるからだろうと考えをめぐらせている。

#### 問四 辞書的意味を資料として本文の趣

旨を踏まえて文学的表現を味わう  
1はあまり聞きなれない「褓（ひだ）」（理科では小腸のはたらきで学習するか）と生活（本文内容）を組み合わせた語句の意味を考える。褓の意味として本文中の内容と関連が深いものは、「心の褓」と用いるような、外部からでは分かりにくい複雑で微妙な部分の意味だろう。本文では個々の、ありふれた、普通の日常生活の中に幸せがある趣旨が述べられているため、ア意識されない日常生活を選びたい。

2は1同様、「幸せとは何か」という主題（問い、問題、課題意識）に焦点を当てた読解を進め、オンラインで「つながる」ことと対比した、直接会う意味での「会う」に、条件を踏まえて「よろこび」を加えた部分を特定したい。

問五 出典の趣旨の確認とインタビュー  
場面（言語活動）での技術と態度

本文中で西加奈子さんが引用している記事は、ブレイデイさんとの会話の主旨とのつながりを意識したものである。実際のもとなつたウェブサイト上の記事を見ると、働こうえでチームワークを發揮するには、というインタビューの意図をもとに、霊長類研究の専門家である山極先生へのインタビューが進んでいく。その際棕田さん（「さん」）の継承は出題者側で敬称を用いた）のインタビューには、山極先生の発言内容をまとめ、繰り返すなど、話し手が話しやすい工夫がみられる。対して山極先生はインタビューの主旨を踏まえながら専門的な見地から人と動物（猿）を対比させながら、人間集団について考えを述べていく。この時インタビューは聞き手に徹しており、意見を述べたりはしていないことに注意したい。

問六 本文の主旨から一つのテーマについて考察する（パネルディスカッションでの提言内容）

他者の身体を必要としているとは、視聴覚を中心に、オンラインツールを介して脳で「つながる」ことではなく、直接会って五感を使つてつながるよろこびには他者と身体（的感覚）が必要だと述べてい

る。右を中心に、追加された資料とのつながりから派生して考えることのできるテーマを検討していけばよい。Aは本文で複数の幸せのかたちが提示されていること、幸せを頭（脳）で考える（意識する）のではなく、日常や直接身体感覚でふれあう意見が提示されている。Bは資料二から人間が進化の過程の中で脳でつながることや科学技術を発展させたことにも触れているため、この点を否定しきるのではなく、身体でもつながる大切さについて提唱しようとしている。Cでは昨今の「コロナ禍」で意識された物理的接触を避け距離をとる生活や、反対にオンラインに代替された生活の良い面や悪い面について考える契機とすることが提唱されている。Dのみ、言葉を中心テーマに、身体とのつながりは論じられていない。

### 【三】古典（古文）

〈出典〉『伊曾保物語』

古代ギリシアの寓話「イソップ物語」の翻訳をしたものである。江戸時代初期に成立。

問一 歴史的仮名遣いの知識と音読

古典は現代語による学習と異なり、日頃馴染みのないものであるため、平素か

ら意識して音読して読み慣れておく必要がある。

二重傍線 a「いたづら」は、「ち」「づ」が現代語では「じ」「ず」を用いるという知識があれば解答できる。

b「言ふ」と c「いこう」は、ハ行音はア行音に改める、a + u の発音は o + u の発音に変化する等の規則を知っていれば解答できる。

歴史的仮名遣いを現代仮名遣いにするため、ためる規則は他にも複数存在するため、受験生(学習者)各自、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いにあらためる規則について理解、整理しておく。その際、知識だけ蓄え問題が解答できるといったレベルに留まらず、発音・音読を旨としてトレーニングに励んでほしい。

問二 主語の把握と因果関係の理解

この設問に取り組むためには、主語を適切に補いながら傍線部までの内容を理解できたかがポイントである。

本文は、ねずみ達がどうすれば猫に捕まらないか相談し合っているという話である。そのため、傍線部③「油断して捕らるる」のはねずみだということが分かる。そしてその理由は、傍線部③の直前に「密かに近寄りて来るゆる」と述べられており、この主語はねずみを捕まえるために近づく猫である。

以上の内容を踏まえ、エを選択しよう。

問三 内容展開と同義関係

この設問に取り組むためには、傍線部の直後の内容を理解する必要がある。

ねずみ達が猫に捕まらないためにはどうしたらよいだろうかと悩んでいると、一匹のねずみが「何より良き手段」を提案する。それは、傍線部④の直後「猫の首へ鈴を付け置かば」というものだ。

以上の内容を踏まえ、イを選択しよう。

問四 本文脈を踏まえた現代語訳

この設問に取り組むためには、問三で取り上げた「何より良き手段」を実行した場合どうなるのかを考える必要がある。ねずみ達は、猫が「密かに近寄りて来る」から「油断して」捕まってしまうと考え、その対策として「猫の首へ鈴を付け」という案が出される。もし猫へ鈴を付けたら、「たとえ足音はせずとも」猫が近寄りて来るのが分かり、「こなたに油断はあるまじ」となるのである。

以上を踏まえ、選択肢「アこちらが油断することはないだろう。」を答えよう。

問五 因果関係と寓話の趣旨の理解

この設問に取り組むためには、傍線部の直前の内容を理解する必要がある。猫に捕まらない対策として「猫の首へ

鈴を付け」という案が出されたが、誰も実行者を名乗り出なかったため、話し合いが終わってしまったのだ。以上の内容を踏まえ、ウを選択しよう。残りの選択肢は部分的な記述は見られるものの、選択肢の趣旨と本文の趣旨とは合致しない。

#### 問六 寓話と寓意の対比

この設問に取り組むためには、空欄の直前の内容が指し示す存在を本文全体から導く力が必要である。

空欄 I までの内容で、後先をわき

まえず、考えありげに「口をたた」いた者は誰か考えると良い。それは、実行もできないのに「猫の首へ鈴を付け置」こうと提案した「一つのねずみ」である。

以上を踏まえ、設問の指示にしたがい「ねずみ」と三字で答える。

#### 問七 本文の趣旨とことわざの理解

この設問に取り組むためには、本文全体の内容を捉える力が必要である。

問六で触れたように、実行もできないのに「猫の首へ鈴を付け置」こうと提案した「一つのねずみ」について、本文で後先をわきまえず、考えありげに「口をたた」いた者と述べられている。つまり、言葉を発する際には十分に注意しなければならぬという教訓が込められているのだ。

以上の内容を踏まえ、ウを選択しよう。

#### 問八 文学史

文学史も、古文読解において重要な知識である。文学は、当時の世相を反映し、その時代を生きる人々が生み出すものである。作品中に登場する登場人物の行動や、心情、社会の反応、全てにおいて社会背景が影響している。よって時代や作品のジャンル、作者についての理解は重要である。現代文も同様に、文学史を歴史の流れとともにおさえよう。

#### 【その他の選択肢】

Aの伊勢物語は平安時代成立の歌物語。在原業平がモデルとされている「男」の一代記。イの平家物語は鎌倉時代の軍記物語、作者・成立年未詳。平家一門の栄華とその没落・滅亡を描く。文章は和漢混交文、七五調を主とする律文と散文とを織り交ぜた詩的なものである。仏教の因果観・無常観を基調としている。平曲として琵琶法師によって語られる。ウの栄花物語は平安時代後期の歴史物語。作者不詳、四〇巻。藤原道長の栄華を中心に宮廷貴族の生活を仮名文で編年体に記す。エの源氏物語は平安時代の作り物語、紫式部の作。日本のみならず世界でも著名な古典文学作品。

【現代語訳例】

ねずみが大勢集まって相談していたことには、「いつも、あの猫という悪賢い者に捕られる時、何度悔やんでも、その甲斐がない。あの猫が、声を立てるか、足音でもすれば、（私たちねずみは）前もって用心し、決して捕まるまいと思うけれども、（猫が）密かに近寄って来るため、（私たちねずみは）時々油断して捕られるのだ。どうしたらよいだろうか」と言ったら、一匹のねずみが、進み出て申し上げたことには、「それには何より良い手段がある。あの猫の首へ鈴を付けて置けば、たとえ足音がしなくても、こちらが油断することはないだろう」と言うと、みんなが、「いかにもその通りだ」と言ったが、大勢のねずみの中から、ただの一匹も、「猫の首へ鈴を付けに行こう」と言う者がいなかった。ついに、その相談は終わってしまった。

そのように、人も後先をわきまえず、考えありげにしゃべる者は、ねずみに等しく、しまいには恥をかくものなので、「口は禍いの門」と心得るべきである。